

学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者名 水町 誠司

論文題名

「黒社会」の巨頭杜月笙の総合的研究

—— 1920～50年代 ——

(論文内容の要旨)

1 本論文の特色

杜月笙は上海租界の重鎮であり秘密結社青幫の頭目かつ「上海三大亨」の一人であった。杜月笙に関する先行研究は数多く存在しており、その数は杜月笙と同じく「上海三大亨」である黄金栄、張嘯林の先行研究よりも豊富である。ただし、杜月笙が秘密結社の無頼人物であることからか、歴史的観点からの実証性には乏しい研究も数多く存在している。また、杜月笙と関係が深く互いの動向に大きな影響を与えた蒋介石や戴笠に関する先行研究も多数存在している。つまり、杜月笙やその周辺人物の先行研究は豊富に存在している状況である。主に研究が行われているのは中国であり、その理由としては杜月笙が中国人であり中国にて活動していた人物であることが原因であろう。

そのような中で、本論文は杜月笙に関して歴史学の観点から考察、分析、及びその立ち位置を詳細に明らかにした。1920年代後半から1950年代初頭までにおける、杜月笙の勢力や権力、権益や利益、それらの影響力に対しできる限り実証的に迫り、考察や分析を加えた。その結果、杜月笙は上海において、政治的、経済的及び黒社会（中国の裏社会）、上海租界の外国人や最下層民を含めた社会全体に絶大な影響力を有していたことを解明した。また、従来の論文を含めた研究にて希薄であった、杜月笙の黒社会における具体的な活動や、日中戦争時期に南京で成立した汪精衛政権及びその後後にいた日本軍との関係にも焦点を当てたことは、本論文の特色と言えるだろう。さらに、論文にてほぼ扱いのない、杜月笙の晩年の動向に関しても、その焦点を当てている。その他、杜月笙の動向の中でも特に印象的である上海クーデター（四・一二クーデター）における弾圧、先祖を祭る祖廟の落成式の開催、政治団体である恒社の成立、日中戦争時期の香港滞在中に行ったフィクサー活動等にも視野を広げ、考察や分析を加えている。

2 本論文の構成と各章の概要

本論文は序章、第1章～第7章、終章、及び資料・参考文献で構成されている。なお、本論文の構成は以下の通り。

序章 (先行研究、各章の構成、1900年代から20年代前半までの上海の状況)

第1章 杜月笙と上海四・一二クーデター

第2章 杜月笙と祖廟—落成式を据えて—

第3章 杜月笙と恒社—人間関係、人脈の形成—

第4章 杜月笙の慈善活動—張嘯林、王曉籟、虞洽卿らと共に—

第5章 杜月笙の表と裏の経済活動—三鑫公司、中滙銀行など—

第6章 杜月笙及び上海黒社会と日中戦争

第7章 杜月笙と国共内戦及び上海解放

終章

資料・参考文献

各章の概要は以下の通り。

序章では先行研究や各章の構成、杜月笙が表に出る前の上海の状況について、1910年代から20年代における青幫の解説や黄金榮、張嘯林の動向を扱う。

第1章の「杜月笙と四・一二クーデター」では杜月笙が実行犯となって引き起こされた上海クーデター（四・一二クーデター）にて、杜月笙らが国民党側についた理由や計画などの事前準備、四・一二クーデターの実行、その後の推移や影響について述べている。杜月笙をはじめとした青幫勢力は、各勢力の中で国民党の勢力が最も大きく将来も有望、アヘン取引なども比較的容認しているという理由で国民党側につくことにした。そして、杜月笙は国民党から武器供給などの援助を受けた後、青幫の構成員を動員して四・一二クーデターを実行し、武装したピケ隊と化した共産党員に攻撃を行った。その功績が認められ、杜月笙は蒋介石から陸軍少将などの地位を与えられた。

第2章の「杜月笙と祖廟」では杜月笙が祖廟を建設し、その落成式を1931年6月9日から11日の3日間行い、連日大盛況となったことを述べる。祖廟用の祠堂記や記念の扁額も多数送られており、上海の著名人に留まらず、中国各地の著名人や有力者、上海租界の総領事からも扁額が送られた。

また、中国各地から京劇の男優、女優が集まって演劇を行った。『申報』をはじめ、当時の各新聞が連日杜月笙の祖廟の落成式を記事にしており、日本の『毎日新聞』など海外の新聞も記事を掲載した。落成式を上海史上最大規模の式典として大々的に行った結果、その名声が全国区に広まり、上海においても非常に影響力、権益、名声を高めるきっかけとなったことを述べている。

第3章の「杜月笙と恒社」では、杜月笙は青幫において最大の勢力を誇っていたが、青幫の規則の関係上トップになることはできなかった。そこで、杜月笙は自身の勢力を高めるために、自身がトップとなる組織として「恒社」という高級社交クラブを設立した。杜月笙は1933年2月25日に恒社を設立し、フランス租界に政治団体として登記を行った。恒社の設立により、杜月笙の名前や勢力、影響力などに惹かれながらも青幫を敬遠していたような、表舞台の有力者や名士を加入させることに成功した。そして、杜月笙は彼らと人脈を築き相互利益や相互利用の関係を持つことで、政界や経済界などの上海各界に対し、より大きな影響力を手にしたことを述べている。

第4章の「杜月笙と慈善活動」では、杜月笙が慈善活動に熱心であり、平時緊急時を問わず大金を寄付していたことについて述べる。杜月笙は個人での義捐金はもちろんのこと、チャリティーを主催して集まった金額や、街頭募金など集団で寄付を呼びかけて集まった金額も寄付している。また、他の人物が立ち上げたチャリティーや慈善団体にも義捐金を送り、杜月笙自ら義捐金集めに協力していた。これらの活動は杜月笙の義侠心もあるが、当時の中国では、黒社会の人物が表舞台に立つ際には慈善家を名乗ることが多かったこと、杜月笙は表舞台へ大々的に進出し各種利権や影響力を手に入れたことが影響していた。そして、上海の名士としての地位や名声もより大きなものになった。

第5章の「杜月笙と杜月笙の表と裏の経済活動」では、杜月笙が行った経済活動に関して、いわゆる「表社会」と黒社会の両面から研究し、具体的にどのような活動を行っていたのか、どのくらいの利益を得ていかなる意味を持ったのかについて述べる。表側では、杜月笙は自身が設立した中滙銀行でトップの役職である董事長となり、それ以外に銀行や製粉、紡績、交通といった各種業界の企業にて董事長のほか董事や理事といった重役となった。また、上海にて労働紛争などの問題事が発生した際に、杜月笙は積極的に解決に動き、企業が抱える問題を多数解決した。裏側では、三鑫公司などでアヘンの運搬や売買、181号にて賭博場の管理や経営といった活動を行っていた。

第6章の「杜月笙及び上海黒社会と日中戦争」では、杜月笙、黄金榮、張嘯林の「上海三大亨」が日中戦争時期にどのような活動を行っていたのかについて述べる。杜月笙は基本的には蒋介石が率いる国民政府側についており、蒋介石の命を受けて行動する部分も存在した。ただし、ある程度の距離

を保っており、上海陥落後はあえて香港に滞在していた。また、周仏海を通じて汪精衛側とも多少の
関係を持ち、重慶滞在時期には、日本軍とも物資交換の取引を行うといった関係を築いていた。

黄金栄は高齢であり、上海に留まっていた。汪精衛政権側の役職に部下をつけ、蒋介石側と汪精衛
政権側双方に情報を提供していたが、どちらかに付き従うことはなかった。張嘯林は蒋介石と不仲で
あったこと、汪精衛政権側や日本軍が自身を取り立てたため、汪精衛政権側について上海で活動して
いたが、1940年に暗殺された。このように、杜月笙は黄金栄、張嘯林とは異なり、蒋介石率いる
国民党側が勝利する可能性が高いと考えて行動していた。

第7章の「杜月笙と国共内戦及び晩年」では、杜月笙と黄金栄が日中戦争以降の国共内戦、上海解
放後の新中国に対してどのような関わりを持ち、活動を行っていたのか、またこの2人の晩年となっ
ておりどのように過ごしていたのかを述べる。杜月笙は日中戦争後、その勢力や影響力は衰え始めて
いた。理由として蒋介石との関係悪化、1946年に門弟の戴笠が亡くなったことなどが挙げられる。
それでも勢力拡大を図ったが、共産党による上海解放のため、杜月笙は香港へと移住した。そして病
気による体調悪化にて、活動が制限されている。黄金栄も高齢のため上海に留まっており、上海解放
後は財産の大部分、及び大世界などの役職や経営権も接収され、晩年は質素に暮らすこととなった。

そして終章では、杜月笙の意義と限界及び、本論文で解明したこと及び今後の展望課題、杜月笙の
活動の意義と限界、歴史的位置づけについて述べている。

3. 杜月笙の活動の意義と限界、歴史的 position

まず意義であるが、第一に清朝末期以降、特に上海においては従来のエリート層や富裕層でなくとも
も、本人の才覚と運次第で社会的に成功を収めることができるようになった。そして、その中でも杜
月笙は特に大きな成功を収めた人物の一人となった。本論文で述べたように、杜月笙の出生は平凡で
あり、養育環境は貧困であった上、文字の読み書きにも苦勞する状況であった。しかし、そのような
状況におかれた人物においても、社会的経済的に大成功を収め、上海全体に大きな影響を与えたこと
は杜月笙の意義といつていい。

第二に、杜月笙は黒社会での活動で大きな成果を収めた後、いわゆる表社会の経済界や政界にも進
出して大きな成果を収めたことである。杜月笙が表側にも受け入れられ成功を収めたことは、経済的
には保守的ではなく才覚や判断力、行動力があつたといえよう。杜月笙と同じく上海三大亨である黄
金栄や張嘯林は、杜月笙に比べ経済的にはやや保守的であり、杜月笙ほどには政界や経済界へ積極的

には進出しておらず、基本的に銀行界や報道会社には関わろうとしなかった。この点を鑑みても、杜月笙の先見の明と、より大きな影響力や権益を手に入れるためにはどこを押さえればいいのか、そのことを非常によく理解していたことがわかる。ただし、これは清朝末期から中華民国期にかけての、ある種社会情勢が不安定で混乱していた部分があったからこそなしたことではある。

第三に、杜月笙はその勢力や影響力の大きさから、上海における各階層や各業界、ひいては中国全体や日本側、租界の外国人勢力に至るまで一目置かれ、杜月笙を自分たちの陣営に引き込もうと干渉を行っていたことである。それだけ杜月笙に利用価値があったということであるが、杜月笙の方も各陣営や各勢力を秤にかけており、利用価値を考えていた。つまり、互いに上海で成功を収め、大きな権限や利益を得るために利用価値があると考えて関係を持っていたのである。この結果、杜月笙は蒋介石や戴笠、孔祥熙といった国民党の要人と関係を持ち、中国の政局に関わりや影響を持ち、時には共産党側や日本側、汪精衛政権側の動向にも影響を与えたのである。その影響力は確かに存在し、上海を中心とした中国の動向や政局に関わっていたことから、中国近代史を詳細に掘り下げた際、杜月笙という存在を無視することはできない。

次に杜月笙の限界としては、第一に杜月笙はあくまで後ろ盾を擁して絶大な勢力や影響力を保持していた側面が大きく、後ろ盾が弱体化した際は一緒に勢力や影響力が弱体化したことである。租界の外国人や、国民党、中でも蒋介石や戴笠は杜月笙の後ろ盾として特に大きなものであったが、日中戦争によって租界が消滅し外国人が大幅に減少したことや、蒋介石との関係悪化、戴笠の事故死などで後ろ盾を失ったことにより、杜月笙の勢力や影響力は大幅に減少したのである。黄金栄などの黒社会の同業者を除き、後ろ盾となった人物の代わりに杜月笙が台頭することはなく、晩年の状況を鑑みても杜月笙単独では国民党や特務機関の限界で勢力を伸ばしていくことは難しかったと考えられる。

第二に、杜月笙は社会情勢の時流を読み、機会を手にして自身の利益とすることには非常に長けていた。一方で、あくまで時流に沿って動くことはあっても自身で時流そのものを大きく変える、全体の趨勢をひっくり返すということは基本的に見られない。与えられた状況や環境の中で、最大限の利益を追求して手に入れることはできたが、与えられた状況そのものを主導権を握ってひっくり返す、ゲームチェンジャーのような活躍は見られなかったのである。

第三に、杜月笙の勢力や権益を自身の子供や門弟など、次世代にあまり多くは引き継がせることができずに一過性の勢力に留まってしまった点が強いことである。長期にわたり安定した勢力は築けなかった点においては、決して失敗とはいえないが杜月笙の限界を感じてしまう部分ではある。同時代

の経済界ではジャーディン・マセソン商会、政界では国民党や共産党などが長期に勢力を保有していたため、やはり限界が見えてくる。

①杜月笙の歴史的な位置づけとして黒社会の出自であり、ほぼ無学であった。儒学中心の伝統的な知識人層や、豪商や地主など代々の富裕層とは根本的に異なる。しかし、杜月笙は清朝末期から中華民国にかけて、政治や社会の混乱、上海で顕著だった近代化などの時代を利用し、一代にて表裏両方で大きな勢力を築いた。上海の経済や社会にて租界の外国人を含め、最も影響力を持つ人物の一人となったばかりでなく、上海、率いては中国全土の政治活動に携わり、外国からも一目置かれる存在となった。例として、日中戦争時期に日本軍は杜月笙との物資取引を行っている。

②杜月笙の役割としては、この影響力を行使して上海の労働紛争を解決し、貧困層に対し慈善活動による生活保障を行っていた。行政の手が回らない状況で、社会の安定化を図っていたといえる。一方でアヘン取引や賭博場経営などで黒社会の頭目として活動し、青幫をはじめとした黒社会の勢力拡大を行った。結果として上海は魔都と呼ばれ、世界各国の大都市の中でも特に治安の悪い犯罪都市として名前を轟かせることとなった。

③杜月笙における重要な意味の一つに、四・一二クーデターや日中戦争時期にて蒋介石の指示を受け活動し、中国全体の情勢に影響を与えるフィクサーとなったことが挙げられる。また、国民党に留まらず中国各地の軍閥、日本や日本傀儡政権、共産党員に対し、杜月笙はその影響力の大きさにより相互利用、相互利益の関係を築いていた。このような関係も、中国全体の情勢に影響を与えていたといえよう。

要するに杜月笙は、上海という都市において、上海租界において、蒋介石率いる国民党側にとってなくてはならない人物であった。杜月笙なくして上海という地域をコントロールすることはできず、上海を支配下に置きコントロールしたい各陣営、国民党、共産党、軍閥勢力、租界の外国人、日本傀儡政権や日本軍といった存在にとって、杜月笙は自陣に引き入れ利用する価値や魅力のある人物であった。杜月笙もそのことをよく理解し、相手を利用することでより大きな権益や勢力、影響力を手にすることができた。そしてその結果、杜月笙はより利用価値や存在感が高まっていき、最終的には中国全体の政治情勢を動かすまでに大きな存在となったといえよう。